現代インド研究　第3号 191–207頁　2013年
Contemporary India, Vol. 3, 2013, pp. 191–207

研究ノート

ネパール北西部農村におけるチェトリの女性世帯主世帯の生計活動
―女性の労働力、土地、相互扶助ネットワークに着目して*

岩間　春芽**

Livelihoods in Female-Headed Chhetri Households in a North-Western Nepali Village: With a Special Focus on Female Labor, Land and Mutual Aid Networks

IWAMA Haruka

Abstract

This paper examines the strategies and subsistence activities of female-headed Chhetri households in a Hindu Pahari village in north-western Nepal. Many previous studies on South Asian women point out that female family members are subordinate to male ones, and are denied an education because they are regarded as providers of free labor. These studies argue that such households find it difficult to survive. The women are unable to earn money, they are uneducated and therefore fall into extreme poverty. However, this study finds that female-headed Chhetri households in the region are able to at least maintain a subsistence living. This paper shows that the existence of a female workforce, land ownership, and a mutual aid network play important roles in the subsistence of these female-headed Chhetri households.

要旨

本論文は、ネパール北西部に住むチェトリの女性世帯主世帯がいかに生計を立てているのかを明らかにすることを目的とする。先行研究では、南アジアにおいて女性が家父長制の中で従属的な地位にあり、土地が相続されず教育も十分に受けられないため経済的自立が難しく、夫（父親）が不在の場合、窮乏化すると論じられている。ただ、窮乏化の度合いはカーストや民族、地域による違いがあり、調査村におけるチェトリ女性世帯主世帯は、少なくとも最低限度の生計を

*　本研究は、2007年4月から2009年3月まで平和中島財団日本人奨学生として、著者がネパールに滞在した際に行った現地調査に基づいている。また、2010年10月以降は松下幸之助記念財団の助成を受け、2011年4月以降は中部奨学会の奨学生として調査研究を行うことが可能となった。この貴重な機会を与えていただいた3財団に対し、ここに深謝の意を表したい。

**　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

・2012、「ネパール北西部農村における人の範疇化―援助と教育の広まりによる変化」、『現代インド研究』、第2号、pp. 169–181.

維持することが可能である。これらの世帯の生計を支えているのは、基本的な農作業を担う女性の労働力、(元) 夫の残した土地、足りない土地や労働力を確保するための相互扶助ネットワーク、の三つの要素の存在である。

1. はじめに

本論文の調査地であるネパール北西部農村はヒンドゥー教のパルバテ・ヒンドゥー（パハディ）の居住地域である。ベネットの報告によると、当地域は保守的なヒンドゥー教徒が住む地域で、ジェンダー分業が明確にある［Bennett: 1983］。また、灌漑や車道などインフラがほとんど整備されておらず、各世帯が１ヘクタール以下の土地で零細な農業を営み生活しているという報告もある［マハラジャン・三木 2003: 137–138］。

本論文の問いは、このような地域において女性世帯主世帯の最低限度の生計を保障しているものは何か、というものである。ここでいう「女性世帯主世帯」とは、既婚女性をエゴとしてみた時、夫が死亡あるいは他の地域の妻子と同居するなどして不在になっており、子供がまだ世帯に収入をもたらしていない世帯を指す。また、「最低限度の生計」とは、生命維持のための最低水準の生計[1]のことを指す。

先行研究でしばしば指摘されるのは、南アジアの女性は家父長制の中で従属的な地位にあり、土地が相続されず教育も十分に受けられない[2]ため経済的自立が難しく、夫（父親）が不在[3]の場合、生計が立てられなくなり窮乏化するということである［e.g. 八木 2007: 78］。ただ、窮乏化の度合いや様態はカーストや民族、また階層や地域による違いがある。ウィスは都市（タンセン）の高カーストの世帯を調査し、女性が学校教育を受けていないため家事・育児以外の仕事はできず、夫と死別、離別後も実家に帰るのも困難で、再婚もできないため困窮することが多いと述べている［Weiss 1996; Sharma 1996: 8］。また、ネパール農村のパルバテ・ヒンドゥーの居住する地域であれば、バフンの場合、女性は土地を相続できず、教育も受けられず、自ら農作業をできるわけでもないため、夫と死別、離別後は生計を立てることが難しくなると指摘されている［Bennett 1983: 28］。一方、キャスパーは出稼ぎの多いネパール丘陵部で調査を行い、男性不在の間、女性が実質の家長として自ら働きつつすべてを取り仕切り生計を立てているということを述べている。この研究は女性世帯主世帯についてのものではないが、丘陵部において女性が農作業や家事などをして働くことで男性不在でも生計が成り立つ[4]ということを示唆している［Kaspar 2005］。キャスパーの研究はグルン[5]の多く住む村での調査を元にしたものであり、その点も既述の高カーストの研究とは異なる。グルンを含めジャナジャーティー[6]の多くにおいては、高カーストと異なり女性が自ら農作業を行い、食糧を生産することができるし、一部地域では出稼ぎによる男性の不在も一般的である。夫が死亡した場合でも再婚が可能であるため、パルバテ・ヒンドゥーのバフンのように極端な窮乏化はせず、生活することが可能である。

では、本論文の調査対象であるチェトリ[7] の女性世帯主世帯はどうだろうか。調査村のチェトリは部分的に農業労働者を使うこともあるが基本的に自ら農作業をし、その農作業の大半は女性が担う。男性不在でも再婚は不可能で実家に帰ることも難しい。また、男性の出稼ぎは一般的ではない。つまり、先行研究のバフンともジャナジャーティーとも異なるのである。よって、本論文では先行研究のどれとも異なるチェトリの女性世帯主世帯がどのようにして生計を立てているのか、他の世帯と比較することを通して明らかにする。

2. 調査地の概要

ここでは、筆者が実施した調査および調査村の概要を述べる。調査は 2007 年から 2009 年の間で計 15 ヶ月、筆者が単独で行い、全世帯の調査をふまえて、12 世帯の重点的な調査と参与観察を実施した。本論文は、その調査結果をもとにしている。調査村はネパール北西部のカルナリ県に位置する標高約 1,900m の村である（図 1、2）。郡庁所在地のあるバザールまでは徒歩 15 分、平野部まで続く車道の終点からは約 100km、チベット国境までは徒歩 3、4 日の所に位置する。調査村には 287 世帯、1787 人が住んでいる。ヒンドゥー教のパルバテ・ヒンドゥーの高カーストであるチェトリ（234 世帯、1517 人）とタクリ（5 世帯、24 人）[8]、ダリット[9] のカミ（3 世帯、21 人）、サルキ（14 世帯、67 人）、ダマイ（28 世帯、133 人）、チェトリとダマイの婚姻により生じた世帯（3 世帯、25 人）が混住しているが、最上位のバフンや他の民族は住んでいない。調査村の 99％の世帯（284 世帯）が農業を営んでおり、45％（128 世帯）が雇用兼業（公務員や NGO 職員）の世帯である。農業を営んでいない世帯（3 世帯、1％）は、小規模商店主および給与生活者である。雇用以外の現金収入源となる仕事としては、大工（51 世帯）、楽器の演奏（26 世帯）、農具の製作と修理（14 世帯）、小規模商店（12 世帯）、蒸留酒の製造と販売（11 世帯）、仕立て（11 世帯）、食堂（8 世帯）、ラバでの荷運び（7 世帯）、出稼ぎ（6 世帯）、不動産賃貸（6 世帯）、鍛冶屋（3 世帯）、靴屋（3 世帯）、看板描き（2 世帯）、助産師兼保健師（2 世帯）がある[10]。農産物（主にリンゴ）や家畜（主にヤギ）の売買をして現金収入を稼いでいる世帯も 39％ある。チェトリはダリットよりも多く土地を所有する傾向にあり、自ら小農として自給自足的な農業を営んでいる世帯もあれば、ダリットや一部のチェトリを農業労働者として雇い、人手が足りない時に農業労働をさせる世帯もある。ダリットは鍛冶屋仕事、脱穀具の製作と修理、楽器の演奏と小規模な農地での自作、大工や農業労働などを組み合わせて生計を立てている。カミは鍛冶屋仕事をし、サルキは脱穀具[11] の製作と修理、ダマイは儀礼での楽器の演奏をする。そして、それらの見返りとしてチェトリが穀物や現金で支払いをするという慣習的な交換関係がある。ただし、ダマイは安価な中国製の既製服がバザールに出回るようになった影響で服の仕立ての仕事を失いつつある。また地域全体としてマオイスト支持者が増加している。しかし基本的なカースト間の交換関係に変化は見られない。

ここでは、調査村の世帯を当該地域での認識に合わせ、現金収入源となる仕事の内容で上層、中

層、下層、最下層に分類する。上層は給与生活者が最低一人いる世帯（世帯構成員の数にもよるがおおむね年収 72,000 ルピー以上）、中層は現金収入を伴う雑業を最低一つしている世帯、ただしダリットの場合は農業労働＋大工などの雑業をしている世帯（年収 20,000 ルピー以上 72,000 ルピー未

図１　カルナリ県の位置（著者作成）

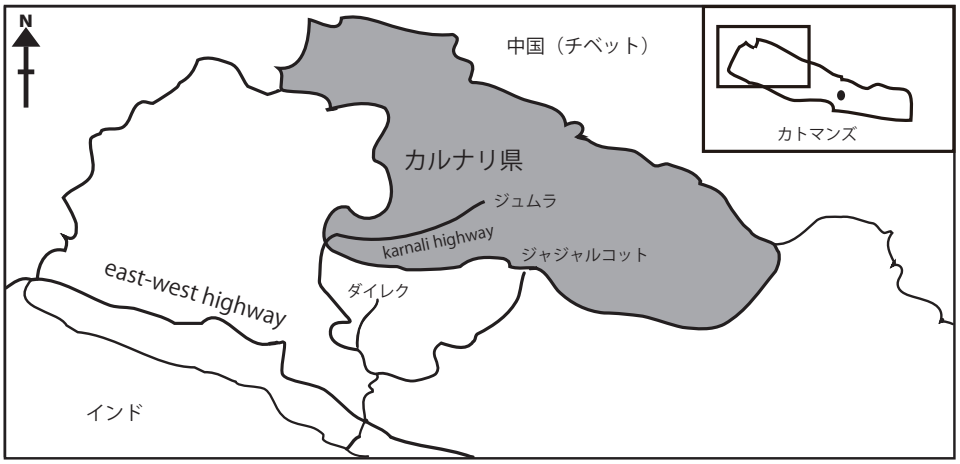
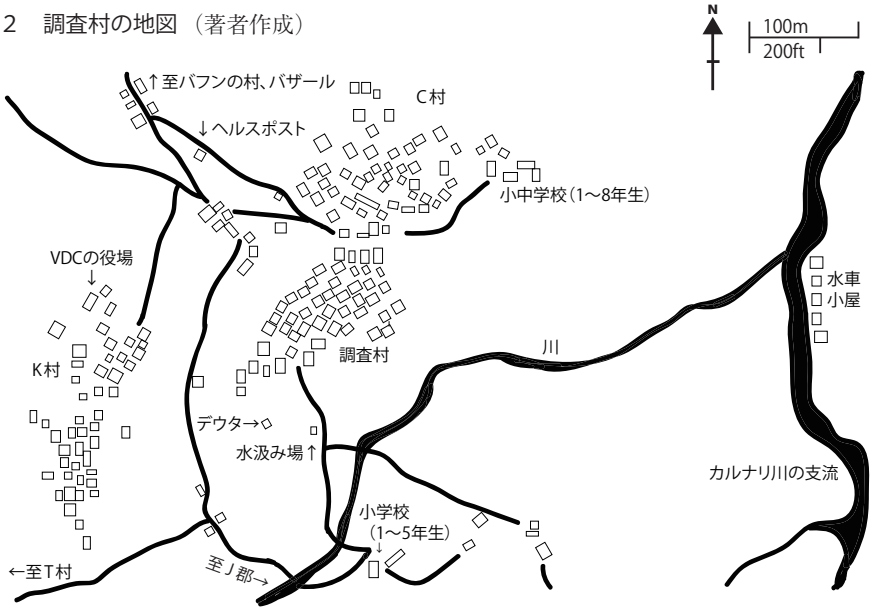


図２　調査村の地図（著者作成）



満)、下層は雑業なしで農産物を販売している世帯（年収 20,000 ルピー未満)、最下層は農業（自給）のみ、農業労働のみか、農業労働と鍛冶屋、脱穀具の製作、儀礼での演奏などをしている世帯（生命維持のための最低水準の生計を維持できる程度の収入）である。上層は 130 世帯で（うち高カースト 129 世帯、ダリット 1 世帯)、中層は 70 世帯（うち高カースト 54 世帯、ダリット 16 世帯)、下層は 48 世帯（全て高カースト)、最下層は 39 世帯（うち高カースト 11 世帯、ダリット 28 世帯）である。女性世帯主世帯の 13 世帯（全体の約 5%）のうち、チェトリの 2 世帯は中層に、チェトリの 9 世帯は下層に、ダリットの 2 世帯は最下層に分類される。なお下層は全体の 17%を占める。

3. 生計活動を成り立たせる資源

調査村における貧富の差には、それぞれの世帯の現金収入の程度が大きな影響を与えているが、更に細かく見ていくと 5 つの資源の有無が重要であることがわかる。すなわち、女性の労働力、相互扶助ネットワーク、男性の労働力、有力なネットワーク、土地である。薪、水、石などヴァナキュラーな資源も生計活動には欠かせないものだが、アクセス権に差がないため貧富の差には直接関係がなく、ここでは詳細は論じない。上層の世帯は 5 つの資源全てを有している。特徴的なのは、中層以下の世帯にはない有力なネットワークを持っている点である。「有力なネットワーク」とは、端的に述べると、高カーストの一部の世帯が持つ、家族や親族などの近しい関係にある有力者（政治家、公務員、NGO 職員など）とのコネである[12)]。調査村において有力なネットワークの有無は貧富に直結する重要な資源であるが、本論文では下層に焦点を当てており、下層は有力なネットワークを持たないため、ここでは論じない。中層は有力なネットワークを持たないがそれ以外の資源を持ち、下層になると有力なネットワークだけではなく男性の労働力も持たない。最下層はそれに加えて女性の労働力や土地も少ない、あるいはない状態にある。また土地所有については、チェトリであれば 1 ヘクタール前後の土地を所有し、ダリットであればその半分程度と、カースト間には大きな格差があるが、同カースト内の大きな差はない。当該地域には灌漑がなく、一部現金収入の多い世帯で少量の化学肥料の使用がみられるが、大半は牛糞に松葉を混ぜて発酵させた肥料を使っている。穀物は、最低限の労働力さえ確保されれば得られ、同カースト内世帯における農産物の収量の差は明確な形では見られない[13)]。よって本論文では土地についてはカーストによる違いにのみ着目し、それ以上の詳細な検討は行わない。以上の理由から、本論文では女性世帯主世帯の最低限度の生計を保障する上で重要な役割を果たしている女性の労働力、土地（カーストによる違い)、相互扶助ネットワークを中心に論じる。

女性の労働力と土地については紙幅の都合で詳しくは述べないが、相互扶助ネットワークはいくつかに分類できるため、具体的事例に入る前に説明しておく。相互扶助ネットワークには、1. 親族のネットワーク、2. 友人のネットワーク、3. 近所に住む人のネットワークの大きく分けて 3 つがある。ただ、近所に親族や友人が住んでいることも少なくないため、これらが重なることもある。当

該地域の親族は父系であり、財産の相続などは基本的に父系を通じて行われる。ただし、1. については、父方の親族のみならず、母方の姻族と労働交換を行うことも少なくなく、父方母方両方のネットワークが存在する。女性世帯主世帯にも両方のネットワークがある。生計を立てる上で最も頼りにできるものが 1. である。2. と 3. は 1. ほど強固ではないが､生計を立てる上での一助となっている。

これら 1. から 3. のネットワークの中で労働と土地の交換が行われている。この地域における労働交換のあり方は、A-1. 親族内での労働の贈与交換、A-2. 村内の同カースト同士の労働交換、A-3. 近所に住む人との労働の贈与交換、の３つがある。A-1 は家事や育児、農作業や家の建築の時などどんな労働でも行われ、人手が足りなければ相互に融通しあうというものである。返礼はするが、返礼が行われるまでの期間が非常に長かったり形式が異なったりすることも少なくない。土地を耕すなど肉体的に負担の大きい作業を行う場合もあるが、それに対しても直接的な返礼がなされることはない。いつか返礼がなされるであろうという信頼関係があるためである。A-3 についても仕事内容は A-1 と類似しているが、A-1 よりも労働交換に近いものであり、返礼が必ずなされることが期待される。労働の内容も負担の少ないものが多く、頻度も A-1 ほど多くはない。A-2 は主に雨季に米やシコクビエの草取りと移植を行うときに行われ、1 日働いたらそれと同じだけ働いて返すというものであり、労働力不足を補うというよりも単調な作業を単独で行うことの苦痛を紛らわせるために行われる。これら A-1 から A-3 はどれも現金の支払いを伴わないため、収入の多寡とは無関係に行われており、女性世帯主世帯においても、頻繁に行われている。賃金の支払いを伴う農業労働も行われているが、労働交換よりも頻度が少なく、A-1 から A-3 と異なり、異なるカースト間で行われるもので同じカースト内のネットワークを主題とする本論文の主題から外れるため、ここでは詳しくは述べない。

調査村ではネットワーク内での土地の無償貸与も行われている。土地の無償貸与は、B-1. 親族のネットワーク、B-2. 友人のネットワーク、の両方で行われており、貸与の仕方において両者の間には明確な違いはない。土地は労働と異なり、個人間の信頼関係がないと行われないため、近所に住んでいるというだけでは行われず、特定の友人同士、親族間でのみ行われる。これらは一時的に無料で土地の貸与をするというもので、貸す側は土地の多さの割に世帯構成員が少なく、農作業をしきれないため貸す。借りる側は自分の世帯の土地だけでは世帯構成員が消費するだけの農作物が充分に生産できないため借りる。例えば、娘が嫁いだり息子が都市に進学したりしたなどの理由で、一時的に世帯構成員が少なくなったために土地が余った世帯が、子どもが生まれたなどの理由で世帯構成員が増えて、より多くの土地を必要とする世帯に土地を貸す、という形である。期間は数年間であることが多い。全体の傾向としては、比較的広い土地を所有する世帯（1 ヘクタール以上）や世帯構成員が少ない状態にある世帯の多くは土地を１～２ハル貸しており、子供が増えたなどで世帯構成員が多い状態にある世帯が同じくらい借りている[14)]。女性世帯主世帯も世帯構成員が多ければ土地を借り、世帯構成員が少なければ土地を貸すという形で、これに加わっている。

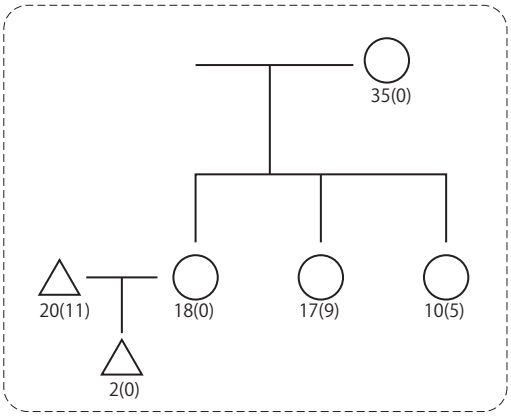
4. 事例―4 世帯の生計活動

4-1. ゴリカラ・ラワルの世帯：チェトリの女性世帯主世帯

1）世帯の概要：世帯構成と分業体制

この世帯は女性世帯主のゴリカラ、長女、その夫とその間に生まれた男の子、次女、三女の 6 人で構成されている。ゴリカラの夫は、別の女性とその子供達とバザールに住んでおり、調査村にくることはまれで、経済的なつながりも切れている。子ども達同士の交流はあるものの、バザールに住むゴリカラの夫やその子供達は家族とはみなされていない。

図 3　ゴリカラ・ラワルの家族



註：1）数字は年齢、カッコ内の数字は学歴（学校で学んだ年数）
　　2）点線で囲まれているのが 1 世帯（家計を共にしている）

この世帯では基本的に自給用の穀物や野菜の栽培と、現金収入源であるリンゴ栽培によって生計を立てており、先の区分では下層に分類される。リンゴ栽培はゴリカラの夫の弟が農業改良普及所で働いていた関係で約 20 年前にはじめたもので、この世帯の主な現金収入源となっている。野菜のように草取りや肥料運びをしなくてよいので手間がかからず、1 個 5 ルピーと比較的高値で売れるため現金収入を得る上で都合がよい作物と考えられている。ただ、リンゴは年によって収穫量が変動するため、豊作の年は 15,000 ルピー程度の現金収入が得られるが、そうでない年は数千ルピーのみという不安定な部分もある。必要支出が最少にとどめても年 8,000 ルピーはかかるため、不作の年は利益がほとんどない状態となる。

農作業をしているのはゴリカラや長女をはじめとした女性であり、この世帯の生計を成り立たせているのは女性の労働力と、ゴリカラの夫が残していった土地であると言える。夫の不在から有力なネットワークから外れ、現金収入も減り、経済的に余裕のない状態にある。

2）女性の労働力、土地、相互扶助ネットワーク

女性の労働力：農作業と家事は、主にゴリカラと長女が行う。三女は学校に行きつつ、補助的にこれらの仕事を担う。長女の夫は学生で、早朝だけ授業に出て、それ以外の時間は畑を耕すなど農作業の一部を受け持っている。しかし、ゴリカラや長女に比べると圧倒的に作業時間も作業量も少ない。牛の世話は世帯構成員の中で手の空いている者が行う。基本的な労働力は世帯の成員で足りているし、現金収入が少なく支出を抑えたいと考えているため、農業労働者を雇うことはまれである。

土地：この世帯の土地は16ハル[15]であり、その面積は1ヘクタールにやや満たないが、チェトリ世帯の所有地としては標準の範囲内である。土地の大半はバザールに住むゴリカラの夫が残していったもの[16]である。また長女が結婚した際、長女の夫が彼の父親から均分相続された土地と、1ハルほど買い足した土地もある。

相互扶助ネットワーク：この世帯は基本的に女性の労働力は足りているが、ゴリカラと長女がどちらも農作業をしている時などは人手不足になるため、ゴリカラの夫方の親族か、長女の夫の実家と共同で牛の世話をする（A-1）。子守や脱穀などちょっとした仕事は近所の人達と手伝いあう（A-3）。雨季の草取りや移植は友人と労働交換を行う（A-2）。また、ゴリカラの友人から1ハル土地を無償で借りている（B-2）。このように少しだけ不足した土地や労働力の不足を親族、友人、近所に住む人の相互扶助ネットワークの中で補い合っている。

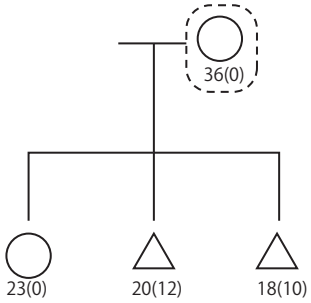
4-2. シタデビ・ラワルの世帯―チェトリの女性世帯主世帯

1）世帯の概要：世帯構成と分業体制

この世帯は基本的にシタデビ（推定年齢36歳）一人からなる。ただ、家族はという質問をすると、都市に住む長男と次男、平野部にすむ長女も家族であるという答えが返ってくる。シタデビの夫はカトマンズで別の妻と子供達と一緒に住んでおり、たまに調査村近くのバザールの家（バザールにも家を保持して貸している）に戻ってくるが、村自体にくることはない。シタデビの夫が調査村を去るときに手切れ金のようなまとまったお金[17]をシタデビに渡して以降、経済的つながりもない。そのため、シタデビは一人で農業をして生計を立てている。経済状態は先の区分では下層に分類される。

長男と次男は幼少時から平野部のボーディングスクール[18]の寮に住みながら学校に通っており、中等教育修了資格（SLC）[19]の試験の前後1年間のみ調査村に住んでいた時があったが、それ以外の時期は調査村にいたことはない。長女は約5年前に近村出身の男性と結婚し、結婚後は平野部の都市に夫や舅姑と共に移り住んでいる。このように子どもたちが一時的に同居することもあったが、基本的にシタデビは一人で住み生計を立てている。

図4　シタデビ・ラワルの家族



註：1）数字は年齢、カッコ内の数字は学歴（学校で学んだ年数）
　　2）点線で囲まれているのが 1 世帯（家計を共にしている）

リンゴは約 20 年前に、農業改良普及所で働いていたシタデビの夫やその両親が植えたもので、それ以降はリンゴの販売をして現金収入を得ている。また、大麦などの穀物や自家製の蒸留酒も売っている。穀物はラバでの荷運びをしている人がエサ用に買いにくるし、蒸留酒は主に調査村の男性達が買いにくる。これらを合計して、年に約 1 万～ 3 万ルピー程度の収入がある。支出はシタデビ本人の衣類などの生活用品の購入費用と農業労働者の雇い賃が主であり、年間 7,000 ルピー程度である。全体としてみると現金収入は必要最低限の分は得られているが、余裕はないという状態と言えよう。

この世帯の特徴は、世帯構成員が少なく土地や生産物に余剰が多い点である。世帯構成員が実質一人であるため穀物の消費量が少なく、余剰の穀物を売っている。男性の農業労働者を雇うこともあるが、大方の農作業は女性の仕事とされておりシタデビ一人で行うことができるため、出費は限られている。労働力がシタデビ一人と限られ不足気味であるが、労働力が限られていても育てられるリンゴや大麦を選ぶことでその不足を補っている。このように、限られた労働力と土地の余剰という条件から、支出を抑え、最大の利益を出すような工夫がなされている。

2）女性の労働力、土地、相互扶助ネットワーク

女性の労働力：労働力は基本的にシタデビ一人である。土地を耕すなどの男性が行う作業は試験前後で息子達がいれば息子達が、不在であれば親族の男性か農業労働者が行う。ただ、男性の仕事はもともとあまり多くないため、シタデビが一人で働いている日が圧倒的に多い。そのため、基本的に労働力は足りているが、十分にあるとは言えない。育児をする必要がないなど、二世代、三世代で生活している世帯よりは必要な労働量は少ないが余裕はない。牛を飼っていないのも、世話をする人手が足りないためである。

土地：土地の大半はシタデビの夫が残していったものである。シタデビは兄弟がいなかったため父から土地を相続しており、その分の土地もある。この世帯の土地は 15 ハルと 1 ヘクタールに満たず、多いとは言えないが、労働力に余裕がないためこれ以上の土地を耕作することは難しい。また、世帯構成員が少なく食糧の消費量も少ないので、土地の約半分を親族や友人に無償で貸している。

相互扶助ネットワーク：この世帯もゴリカラの世帯と同様、夫がいなくなってから有力なネットワークからはずれ、現金収入が減り、窮乏化した。ただ、この世帯の場合は夫が息子達の養育費を全て負担しており、息子達は夫の有力なネットワークから高給な給与生活者の職に就ける可能性が高いため、負の影響が及んだのはシタデビのみである。ゴリカラの世帯と同様、親族、友人、近所に住む人の相互扶助ネットワークで不足しているものを融通しあっている。牛は耕作時に親族から借り、その返礼としてえさになる穀物の茎をわたしている（A-1）。男性のする農作業や家の改築作業などは親族の男性が手伝ってくれる（A-1）。農業労働者を雇うのが年に 10 日程度、親族の男性が手伝うのが年 30 日程度である。雨季に労働交換をする友人もいる（A-2）。近所に住む、いなくなった夫の兄弟の嫁達やその子供たちとも農作業や儀礼の準備で労働力が不足している時に手伝いあう（A-1、A-3）。また耕し切れない土地を親族や友人に貸している（B-1、B-2）。

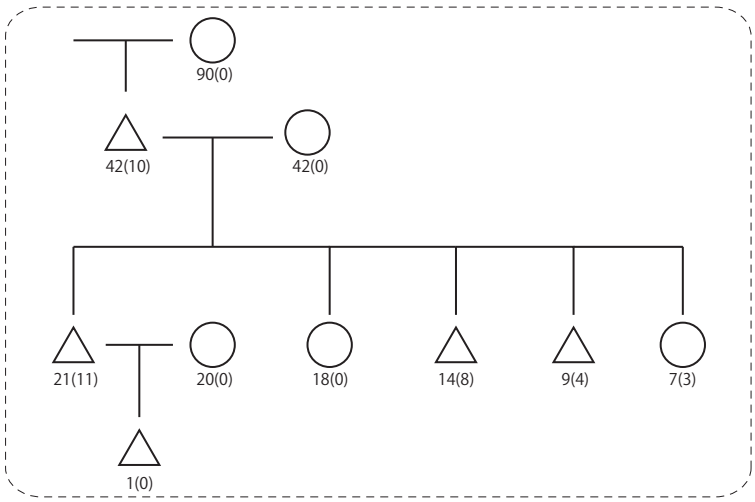
4-3. パンチャバハドゥール・ラワルの世帯―チェトリの男性世帯主世帯

1）世帯の概要：世帯構成と分業体制

ここで比較のために、チェトリの男性世帯主世帯をとりあげよう。この世帯はパンチャバハドゥールの母、パンチャバハドゥール、パンチャバハドゥールの妻、息子三人と娘二人、長男の嫁とその子供（孫）の 10 人で構成されている。パンチャバハドゥールと長男がラバでの荷運びを交代で行い、それ以外の手の空いている者がヤギ・羊の世話をして現金収入を得ている。また、女性達が農作業や家事などをして食料を得ることによって基本的な生計を立てている。ラバでの荷運びとは、平野部から隣の郡まで車で運ばれてきた食料や衣料品、援助米などをバザールや村の店まで運ぶというものである。この世帯は先の区分では中層に区分される。パンチャバハドゥールの母は推定 90 歳と高齢であるので、家にいて家事や子牛の世話、子守りをしていることが多い。長女以外の子供達は皆学校に通っており、基本的には学校を優先するが、家事や農作業の手伝いもする。長男はラバの仕事を優先させることが多いため、毎日は学校に通えていない。長女は母親（パンチャバハドゥールの妻）を助けて農作業や家事などをしてきたため、学校には通っていない。

現金収入は、リンゴ、野菜、ヤギや羊の売却から年１万～１万５千万ルピー程度、ラバでの荷運びから年４万ルピーほど得られる。支出は年２万ルピー程度であり、給与生活者のいる世帯ほどではないが女性世帯主世帯よりは収入が多く、余裕がある。

図５　パンチャバハドゥール・ラワルの家族



註：1）数字は年齢、カッコ内の数字は学歴（学校で学んだ年数）
　　2）点線で囲まれているのが１世帯（家計を共にしている）

2）女性の労働力、土地、相互扶助ネットワーク

女性の労働力：女性の労働力となっているのは主にパンチャバハドゥールの妻、長女、長男の妻の三人である。長男は結婚したばかりで、長女は近日中に結婚して他の世帯に嫁ぐ予定である。女性の労働力は現在３人あるが､少し前までは２人であったし､少し先には再び２人に戻る。土地が１ヘクタール弱ある状態で女性の労働力が二人という余裕のない状態であるが、補助的にパンチャバハドゥールの母や次女が家事や育児、水汲みなど簡単な仕事を担うことで二人の負担は軽減している。

土地：土地はパンチャバハドゥールが先代から相続したものと買い足したものを合わせて、16ハル弱ある。パンチャバハドゥールは世帯構成員が増え、以前より土地に余裕がなくなってきたと言うが、調査村で土地に余裕がある人達と同様、リンゴの栽培をしているし、菜の花を植え、そこから油を搾って自家消費している。この世帯の男性は、土地を買い足して農作物を作り売ることよりも、農業以外の仕事をして現金収入を得ようとしており、土地をこれ以上買い足すことは希望していない。

相互扶助ネットワーク：この世帯は労働力も土地も足りているため、相互扶助ネットワークに頼ることは少ない。唯一必要とするのは雨季の草取り、移植の時の労働交換（A-2）のみである。

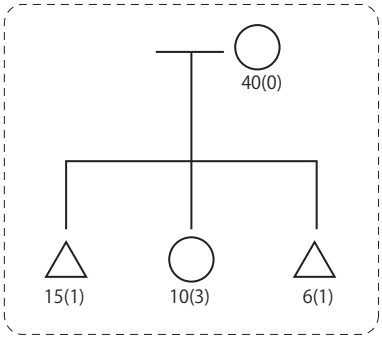
4-4. リシムカル・ビャルの世帯―ダリットの女性世帯主世帯

1）世帯の概要：世帯構成と分業体制

最後に、ダリットの女性世帯主世帯を比較のために取り上げよう。この世帯はリシムカル、次男、

四女、五男の４人で構成されている。リシムカルの夫は約10年前に亡くなり、夫が亡くなった後は長男が代わりに働いていた。しかし長男は嫁と共にインドへ出稼ぎに行き、そのまま調査村に戻らなくなった。また、四女の上に三人姉がいたが、皆嫁いだため、現在の４人となった。リシムカルは農作業や家事などを全くできないわけではないが、しばしば発熱するため十分には働けない。そのため、10歳の四女や、嫁ぎ先から一時的に戻ってくる娘達がこの世帯の農作業や家事の多くを担っている。夫が亡くなり、長男がいなくなってから男性の労働力がなかったが、次男が15歳になり、大工の仕事をはじめるようになった。サルキの仕事である脱穀具の修理や製作の仕事は、長男がいなくなってからもリシムカルや次男が近所に住む同カーストの人達の手助けを受けながらかろうじて続けてきた。これまでは現金収入は嫁いだ娘達が農業労働をして稼ぎ、穀物は所有している土地と脱穀具制作の仕事から得て生計を立ててきた。大人の男性が不在で現金収入が少なく、本来農業労働ができる大人の女性であるリシムカルが病気がちで農作業ができないことから、かなり困窮した状態にあり、見かねた近所に住む同カーストの男性たちの助けで何とか糊口をしのいでいるという状態である。先の区分では最下層に分類される。

図６　リシムカル・ビャルの家族



註：1）数字は年齢、カッコ内の数字は学歴（学校で学んだ年数）
　　2）点線で囲まれているのが１世帯（家計を共にしている）

今のところ現金収入は嫁いだ娘たちが農業労働をして得るもののみである。農業労働の日給は200ルピーで、支出は切りつめても年に6,000ルピー程度かかるため最低でも年に30日農業労働をしなければ赤字になる。嫁いだ姉たちがこの世帯の所有する土地での農作業をこなしたうえで、さらに年間30日も農業労働をするのは難しく、赤字の状態が続き、借金をしている。

この世帯は自給した食糧だけでは足りないが、自作の穀物に加えて脱穀具製作の仕事をして得た穀物を足して、必要最低限の量を確保している。なおこうした状況は、サルキの世帯では一般的である。

2）女性の労働力、土地、相互扶助ネットワーク

女性の労働力：女性の労働力は不足している。リシムカルが病気がちで十分に働けないし、子供達もまだ小さいので大人の女性のようには働けない。そのため、この世帯を支えてきたのは嫁いだ娘達である。本来、嫁いだ女性は嫁ぎ先の労働力として働くことを期待されるため、実家の仕事はあまり手伝えない。しかし、嫁ぎ先の世帯の人たちがこの世帯の極度な労働力不足という状況を理解してか、この世帯では嫁いだ娘達が手伝いに戻ってくることが可能である。労働力は不足しているが、農業労働者を雇うことはない。むしろ雇われる側である。これは経済状態によるというより、ダリットは一般的に農業労働者として雇われることはあっても雇うことはないという社会的な理由によるものである。

土地：土地は亡くなったリシムカルの夫が先代から相続し残していったもので6ハルほどある。所有地はチェトリの平均と比べると半分以下であるが、周囲の裕福なダリットと比べても変わらず、ダリットのなかでは特に少ないというわけではない。ただ、土地が少ないためにチェトリの世帯のように現金作物を栽培して売ることができず、それが現金収入の方途を狭めているということはいえる。

相互扶助ネットワーク：この世帯は親族から牛を借りたり（A-1）、近所の同じカーストの人たちから脱穀具製作の仕事を手伝ってもらったり（A-3）、嫁いだ娘たちが手伝いに来たり（A-1）と、調査村内外の様々な立場の人たちの助けがあり、それでかろうじて生活を成り立たせている。この世帯は調査村内の上層の世帯から借金をしているが、こういうことは滅多に見られないことで例外的なものである。ちなみに、インドへ出稼ぎに行きそのまま戻らない長男とその妻子とは縁が切れている。経済的なつながりはなく、連絡を取り合うこともほとんどない。

5. 結論

これまで見てきたように、チェトリの女性世帯主世帯の最低限度の生計は、男性が残していった土地で女性が自ら農作業をし、食糧を自給すると同時に、リンゴや大麦など労働力が少なくても育てられる作物を販売し現金収入を得ることで成り立っている。部分的な労働力不足や一時的な土地不足は相互扶助ネットワークで補い合う。残された女性たちは再婚することも実家に帰ることもできないが、こうして最低限度の生計を立てることは可能である。

こうした状況の前提としてあるのは、女性世帯主世帯に限らず調査村におけるほぼ全世帯の生計活動において、女性が農作業をはじめとした労働の多くを担っているということである。女性世帯主世帯は男性世帯主世帯に比べると現金収入が限られているが、女性が農作業の大半を担っているため、ゴリカラやシタデビの世帯のように男性の労働力がなくても食糧を確保することができ、最

低限度の生計を立てることは可能である。

チェトリの男性世帯主世帯と女性世帯主世帯を比べると、男性の労働力の有無という違いがあり、女性世帯主世帯では男性の労働力が不足している。そのため、女性世帯主世帯は相互扶助ネットワークで不足している労働力を補っている。例示したチェトリの男性世帯主世帯は、労働力も土地も足りているため相互扶助ネットワークをほとんど必要とせず自己完結した形で生計を立てることが可能であった。その一方、例示したチェトリの女性世帯主世帯２世帯はそれぞれ労働力不足と土地不足を抱えており、相互扶助ネットワークでそれを補う必要があった。相互扶助ネットワークは男性世帯主がいる世帯でも世帯構成員が少なく労働力不足であればそれに頼ることも少なくないため、女性世帯主世帯特有のものとはいえないが、女性世帯主世帯の多くが生計を成り立たせるうえで必要とするものである。

チェトリの女性世帯主世帯とダリットの女性世帯主世帯を比べると、チェトリの女性世帯主世帯では土地に余裕があるために極端な窮乏化をせずに最低限度の生計を立てることが可能となっているが、ダリットは現金作物を作るための土地がないために容易に窮乏化するという違いがある。チェトリは土地に余裕があるため、比較的手のかからない作物を選択して栽培するなどして現金収入を得ることが可能であるし、相互扶助ネットワーク内で土地を貸借して補うことも可能である。ダリットは男性が不在の場合、女性が他世帯で農業労働をして穀物や現金収入を得ることができるが、女性の労働力に収入は大きく依存する。また、ダリットの相互扶助ネットワークはダリット内のものであり、どの世帯も土地に余裕はないため、ネットワーク内で土地不足を補い合うことはできない。ただ本論文の事例として挙げたリシムカルのように病気ではなく、主たる女性労働者が健康であれば、ダリットであっても女性世帯主世帯が自立して生計を立てることはかろうじて可能である。また、ダリットであっても相互扶助ネットワークを通じて労働力の不足を補うことは可能であり、実際行われている。

つまり、チェトリの女性世帯主世帯が最低限度の生計を立てることの前提としては、女性が労働力として働けるという社会的条件がある。また、相互扶助ネットワークと土地が両方あり、ネットワークの中で労働力や土地の不足を補えるために、労働力や土地が不足している女性世帯主世帯も相互扶助ネットワークのなかで生計を立てることが可能となっている。さらにチェトリにおいては土地に余裕があるため、食糧を自給するだけでなく、現金作物栽培による収入獲得が可能であり、これがチェトリの女性世帯主世帯の家計を支えている。

最後に、女性世帯主世帯の生計活動を支えている制度の一つである相互扶助ネットワークがなぜ維持されているのかについて考察する。まず、根本的な前提としては、調査村の世帯のほとんどが小規模な自作農であり、自分の土地を自分で耕すことを基本としていること、また、農作物を売ることがあっても市場が限定的であるため販売できる量も限られており、労働力は一定以上を必要としないことが挙げられる。農産物市場が未発達であるため、できるだけ多くの土地を所有し、農業

労働者を雇い、多くの生産をあげるという方向に動くことはなく、農作業については賃金支払いを伴う農業労働者を使うよりも、できるだけ相互扶助ネットワーク内で小規模な労働交換をすることを選ぶのである。さらに、家事や育児をはじめとした農作業以外の仕事や、数時間だけの仕事は農業労働者の仕事とはみなされていないため、そういった仕事については賃金を払って任せられる者が存在せず、相互扶助ネットワーク内で行わざるを得ないという面もある。これらの理由から、世帯内の女性の労働力が農作業および家事の大部分を担いつつ、少し不足する分を相互扶助ネットワーク内で融通しあうという現象が生じるのである。

土地の無償貸借が行われる理由としては、同じカースト内では、土地所有が同程度の小規模な自作農が大半を占めるため、時系列的な世帯構成員の増減に伴い各世帯で土地の過不足が生じることが挙げられる。自分の土地を自分で耕すことが原則である丘陵部において、土地は耕作しきれるだけの広さがあればよい。食糧は自分たちの食糧が賄える分だけあればよく、それ以上作っても市場が限定的なため売ることもできず、余るだけとなる。土地に余剰があれば、換金作物をある程度作ることができるが、これが可能かどうかは余剰労働力の有無によるし、その市場も規模は小さい。したがって、必要以上の土地があってもそこから多くの利益を得ることはできず、有償で土地を貸すという行為は一般的ではない。むしろ、長い時間スケールで相互扶助をしていくために、無償で貸すという行為が生じることとなる。全体として見ると、現金収入には世帯ごとに大きな差があるが、土地所有はチェトリであればどの世帯も1ヘクタール前後と大きな差はなく、その中で各世帯の1/10～1/20程度の土地が一時的に交換されている。つまり、小規模な自作農が世帯構成員の増減に合わせて土地を増減させる必要があるとき、相互扶助ネットワーク内で土地の交換により補う、という現象が生じているのである。

このように、世帯に少なくとも1人の女性の労働力が確保されてあること、男性が残していった土地があること、親族、友人、近所に住む人との間の相互扶助ネットワークが存在すること、という3つの条件によって、調査村の女性世帯主世帯の最低限度の生計は保障されている[20)]。

註

1) 「最低水準の生計」とは、成人一人当たり年間1760ルピー程度の生計を指す。これは穀物など食糧のほとんどを自給や農業労働から得て、水や薪などヴァナキュラーな資源を無料で得ることを前提としたうえで、現金で購入する必要がある調味料、服、石鹸などを購入するために必要な金額を計算したものである。

2) ネパールにおける女性の土地の相続や教育に関しては、近年都市部を中心に変化が見られ法的には平等になってきている。しかし農村部である北西部ではそういった変化がほとんど見られず、特に土地の相続に関しては変化が見られない。

3) ネパールにおける男性不在の世帯について幅崎は未婚女性、離婚女性、寡婦を挙げており、この中では寡婦が経済的、社会的に厳しい状態に置かれていることを述べている［幅崎2010］。本論文で取り上げる女性世帯主世帯とは、この分類の中では離婚世帯に近く、未婚世帯と寡婦については言及しない。

4)　ここで言うところの「生計が成り立つ」とは、女性が農作業をし食糧を得ているということを指す。出稼ぎの場合、男性が出稼ぎ先から戻れば男性が現金収入をもたらすが、男性が出稼ぎ先から戻らないケースも見られ、その場合でも女性が農作業をし食糧を得るということは可能である。

5)　グルンとはネパール中西部に居住する山地民である［ビスタ 1993: 148］。

6)　ジャナジャーティー（先住民族）とは、1990年の民主化以降、自文化の独自性を主張しはじめた山地中高地に住むチベット・ビルマ系の諸語を母語とする諸民族の総称である［石井 2012: 922–927］。

7)　チェトリは高カーストでクシャトリヤにあたる［ビスタ 1993: 25］。

8)　タクリはチェトリと同様高カーストでクシャトリヤにあたる。両者の違いは諸説あり明らかでない［ビスタ 1993: 25］。

9)　ネパールにおいてダリットとは職業カーストの総称であり、ダマイ（仕立て屋）、サルキ（靴作り）、カミ（鍛冶屋）、スナール（金細工師）などを指す。全ネパール人口の少数を占め、不均等に全国に散らばっている［ビスタ 1993: 23］。

10)　これらは農業兼蒸留酒の製造と販売兼ラバでの荷運びのように兼業されており、その組み合わせは多岐にわたり、組合せでも数十個あるためパーセントで示すことは難しい。また、それぞれの仕事を行う頻度や収入にも大きな違いがある。

11)　ジャララライロと呼ばれる。木の細い棒を並べて水牛の革の紐で結び合わせたもので、シコクビエの脱穀に使用する。水牛の革を使っているため、この製作がサルキの仕事となっている。

12)　［岩間 2012］では、「コネ」としてその詳細を記している。

13)　ここでは面積当たりの収量を計算する上で、調査村で一般的な単位であるハルを基準として説明する。ハルは一日に耕せる土地の広さの単位であり、面積に換算することはできない。ただ、1ハルからどの程度の穀物の収量があるかというのを複数の人に聞き、実際著者も刈取りや脱穀の作業に参加して確認したところ、3袋程度（約140kg、籾殻付き）の収量の所が多かった。

14)　全世帯のうち、何世帯がどれだけの土地を貸しているのか、あるいは借りているのかについては、十分に調査ができなかった。ただ、12世帯を集中的に調べたところ、そのうち、所有地が1ヘクタールを超える、あるいは世帯構成員が少ない3世帯が土地を貸しており、また1世帯借りている世帯もあったことから、全体の約1/3程度が貸借のいずれかを行っていることになる。

15)　註13)で既に述べたようにハルを面積に換算することはできない。ただ、数か所の土地を計測し、1ハルがどの程度の面積にあたるかを調べたところ、16ハルは1ヘクタールに満たないということは言える。

16)　土地は、名義上、夫のものであり相続もその息子になされる。したがって、これはゴリカラへの相続ではない。この状態はバザールや都市に夫が移り住んだ場合によく見られるもので、夫側からすると調査村に住んでいないので農作業ができず、食糧も購入して足りるため土地は不要であり残したということになる。

17)　手切れ金は全ての夫が残していくわけではなく、ゴリカラの世帯のように全く支払いがなされない場合もあり、夫側の経済状態などにより異なる。

18)　寄宿舎付きの私立の小中学校。

19)　School Leaving Certificate の略称。10年生まで学んだ後に受ける試験で、合否でそれ以降の進路が決まる。

20)　本論文では相互扶助ネットワークと土地について言及し、金融については言及しなかった。その理由は今回取り上げたチェトリの女性世帯主世帯がどちらも借金をせず生活しており、金融に無縁だからである。ただし調査村において金融が全くないわけではなく、現金の貸借が村内の一部の世帯で行われており、ダリットの女性世帯主世帯のような賃貸を行っている世帯もごく一部ではあるが見られる。

参照文献

石井溥、2012、「ネパール」、辛島昇・応地利明・坂田貞二・前田専学・江島恵教・小西正捷・山崎元一（編）『新版 南アジアを知る辞典』、平凡社、922–928 頁。

岩間春芽、2012、「ネパール北西部農村における人の範疇化―援助と教育の広まりによる変化」、『現代インド研究』、2、169–181 頁。

幅崎麻紀子、2010、「「シングル」と名乗り始めた女性たち―ネパール版シングル事情」、椎野若菜（編）『「シングル」で生きる』、御茶の水書房、182–195 頁。

ビスタ、D. B.、田村真知子（訳）、1993、『ネパールの人びと』、古今書院。

マハラジャン ケシャブ・ラル・三木俊仲、2003、「ネパール山間地農村における農家経済と換金作物栽培―食糧確保から見る有効性と課題」、『地誌研年報』、12、135–158 頁。

八木祐子、2007、「女性・身体・暴力―インド」、宇田川妙子・中谷文美（編）『ジェンダー人類学を読む―地域別・テーマ別基本文献レヴュー』、世界思想社、74–96 頁。

Bennett, Lynn, 1983, *Dangerous Wives and Sacred Sisters*, New York: Columbia University Press.

Kaspar, Heidi, 2005, *‘‘I am the Household Head Now!’’: Gender Aspects of Out-Migration for Labour in Nepal*, Kathmandu: Nepal Institute of Development Studies.

Sharma, S., 1996, “Female Headed Households in Nepal,” *Reflections: A Journal on Men, Women and Development*, 2-1, pp. 7–8.

Weiss, Linda Joan,1996, *Women Alone: the Causes and Consequences of Non-Marriage and Marital Disruption among High Caste Hindus in Nepal*, Ann Arbor: U.M.I.